安部公房の描いた満洲引揚男性と 内地日本女性の戦後

——二つの「壁」における「無意味さ」の意味

Tatsuya KAGEKI (蔭木達也 : Research Associate, Keio University)

✉ tatsuya.kageki@gmail.com

(日本) 慶應義塾大学経済学部助教。社会思想史。「神」と対峙する「天皇」のイロニー——十五年戦争下の高群逸枝『母系制の研究』を軸に——(『思想』1158号, 岩波書店, 2020.10) など。

Men from Manchuria and Women in Japan after the Asia-Pacific War : The Meaning of “Meaninglessness” in Abe Kobo’s Two “The Wall” Novels

It is widely known that in his two novels, “At the Guidepost at the End of the Road” (1948) and “The Wall - The Crime of S. Karma” (1951), Abe Kobo depicted the main characters’ anguish after the Japanese defeat in the Asia-Pacific war as the result of “meaninglessness”. He came to this perspective on the basis of struggling with this feeling in his own life. This article analyzes the female Japanese characters, who form a contrast with the main male Japanese characters, in order to explore the question of why this sense of meaninglessness came about. In these novels, Japanese female characters are represented as those who cure the distress men feel because of the latter’s awareness of their responsibility for the aggressive war that took place, and because of their hedonic enjoyment of the liberated society after the war, which these male characters experience as “meaningful” as it allows them to not reflect on the war. The contrasting women characters reflect the social conditions at the time the story was written. Japanese women were not accused of war crimes, nor were they responsible for the subordinate female gender roles which persisted before the war. As a result, the female characters are free of the sense of meaninglessness, and they form a contrast with Japanese male characters who feel anguish at their awareness of their responsibility for the war, and their resultant sense of meaninglessness.

Keywords Abe Kobo (安部公房), At the Guidepost at the End of the Road (終りし道の標べこ), Clay wall (粘土塙), The Wall - The Crime of S. Karma (壁——S・カルマ氏の犯罪), Chaotic times after World War II (戦後混乱期)

1 はじめに

安部公房(1924-1993)は戦後日本を代表する作家の一人であり、その作品は詩や小説から戯曲、映画に至るまで多岐に亘る。彼は東京で生まれ、生後すぐに当時日本の植民地支配下で奉天と呼ばれた中国東北部の都市、瀋陽に移る。幾度か内地に住むこともあったが、敗戦も瀋陽で迎え、1946年に日本へ引き揚げた。1948年に誌上デビューし、1951年に『壁』(月曜書房、1951年)で芥川賞を受賞するまでの安部の初期の作品には、大陸で暮らした経験が色濃く反映されている。例えば、幼少期に安部と同級生であった児玉久雄は、瀋陽の砂漠の情景を思い起こしつつ、「小説『壁』ですか、砂漠を飲み込んでじゃうっていの。それから、ラクダが親しげにやってきましたっていうやつね。あれだけ強く彼が砂漠に惹かれていたというのは、意外なぐらいでした」と語っている¹。また、「植民者の加害の意識をもっとも早く、そして鮮明に表した文学者」と評価されている通り²、侵略民族として植民地に生まれ育ったことに対する敗戦後の葛藤もそれらの作品のうちに反映されている。特に、1960年代に入って、磯田光一が1948年初刊『終りし道の標べに』³と1951年初出「壁——S・カルマ氏の犯罪」(以下、「壁」と略記)⁴という二つの安部の小説を対比しながら「故郷喪失者の現実感覚」と題して安部の「満洲体験の意味」を重視して以来⁵、安部のこの二つの作品における植民地体験の意味は常に問われてきた⁶。

1 児玉久雄「砂山」『贗月報 安部公房全集1サブ・ノート』(新潮社、1997)。

2 波田野節子「引揚げ——日本への移動：加害と被害の意識を中心に」(『国際地域研究論集』11号、2020)、p.12。

3 1948年真善美社刊『終りし道の標べに』を底本とした『安部公房全集1[1942.12-1948.5]』(新潮社、1997)より引用し、(全集巻号・頁数)によってその箇所を示す。全集からの引用は以下同様。1965年に冬樹社から再刊されたものは内容に関する改変が加えられており、その異同については西田智美、蘆田英治、竹田志保らの研究があるが、本論が議論の対象とするのは初刊のみである。

4 本論では、「S・カルマ氏の犯罪」と改題されて1951年月曜書房刊『壁』に三部作の一つとして収録されたものを底本とした『安部公房全集2 [1948.6-1951.5]』(新潮社、1997)より引用する。初出は「壁——S・カルマ氏の犯罪」の題で『近代文学』1951年2月に掲載されたもの。過去の先行研究で小説『壁』と本の『壁』の表記上の混乱が生じたことは、鳥羽耕史が注意を促している。

5 磯田光一「移動空間の人間学——安部公房論——」(初出1966)(『現代日本文学大系76 石川淳 安部公房 大江健三郎集』筑摩書房、1969)、p.441。

6 『終りし道の標べに』は満洲を舞台に「故郷」を求めて彷徨う物語であるため、ほぼ例外なく安部の「故郷」としての満洲が問題になる。『国文学 解釈と鑑賞』36巻1号、1971年1月収録の山田博光、小久保実の分析を嚆矢として、蘆田英治による研究(蘆田英治「安部公房『終りし道の標べに』ノート——「書く」ことをめぐって——」(『論樹』9巻、1995)、pp.113-126)などがある。近年では、波瀲剛が『終りし道の標べに』から「壁」までの間に「満洲」という空間や、中国人との関わりといった個別の問題が潜在化してゆく過程を論じている(波瀲剛『越境のアヴァンギャルド』(NTT出版、2005))ほか、呉美姪が戦中から1960年代という比較的に広い年代を対象に、安部の作品における植民地経験の構造化と満洲の記憶からの切断を論じ(呉美姪『安部公房の〈戦後〉——植民地経験と初期テクストをめぐって』クレイン、2009)、坂堅太が植民地満洲と米軍占領下の日本という立場の転倒という観点から1950年代の安部公房をナショナリズムという切り口で論じている(坂堅太『安部公房と「日本」——植民地／占領経験とナショナリズム——』和泉書院、2016)。並行して、安部公房での瀋陽での年譜的事実について掘り下げた論文も出ており、小説の下敷きとなった安部の経験についても明らかになってきている。木村陽子「瀋陽の安部公房——作家となる以前の執筆活動を中心に——」(『目白大学 人文学研究』11号、2015)、pp.217-235。また、安部の他の作品における満洲体験との関係については解放による諸研究も参照されたい。なお本論では、先行研究の例に倣って、中国東北部のうち日本が侵略支配した地域について、当時の呼称を用いて満洲と表現する。

磯田は、「壁」の主人公が「自己に対して真面目であり、誠実であることによって、その無意味さをバクロする」という安部の発言を引き、「「自己への誠実」が意味をなさない地点」に立っているという点で『壁』は『終りし道の標べに』のパロディといえるかもしれない」と述べている⁷。『終りし道の標べに』から「壁」へいたる系譜に「《私》」の古い内容が、それとはまったく異なる新しい内容によって「究極的には取り替えられていくという主題」があるとした上で、しかしそのような「新しい人間の原型」を創生できない「虚弱な人格たる、ひとりの市民像」が描かれているという高野斗志美の見解も、これに通じるものだ⁸。最近の研究でも同様の見解が引き継がれている。佐藤早希子は、当時「多くの青年たちが戦争協力の経験を持って」おり、「敗戦直後における彼らは、不誠実を働いた自己を戒め、本来の良心と勇気を取り戻すために「主体性の回復」を必要とした」。しかし安部は、そのような「主体性」の確立とは反対に、「自己の喪失と崩壊を慄きながらも受け入れる」ような「主体」を描いた、という⁹。つまり、敗戦体験から逃れるために「主体性」を追い求める同時代の人々が、実際には「虚弱」で、自己に「喪失と崩壊」をもたらし、「無意味」なものに帰結してしまうというアイロニーが、『終りし道の標べに』から「壁」にいたる小説の主人公に描かれている、というわけである。

安部が自らに向き合う主人公の苦悩の「無意味さ」を描いた中に、安部自身を苦しめた「敗戦体験」の意味を見出すことができるという先行研究の解釈を支持するならば、その「無意味」に対して「意味」はどう描かれているのか、ということが疑問となる。そこで注目されるのが、『終りし道の標べに』と「壁」という二つの作品において、主人公に対置されて物語において重要な役割を果たしている人物が、いずれも内地の日本人女性であるという点だ。そこで本論では、安部のこの二つの作品において主人公に対置される人物の描かれ方として、『終りし道の標べに』の与志子と、「壁」におけるY子とを、主人公との対比において分析することを通じて、安部が描こうとした「無意味」の内容を明らかにする。

2 「愛した一切のもの」が賭される「粘土塀」

2.1 「現実」の否定と「放浪」

安部は後年、「敗戦体験は、国家とか郷土とかに帰属しないで、なおかつ人間の存在とは何か、を考えさせた」と語っている。その思索の中で書いたのが、『終りし道の標べに』である。「日本人が徹底した加害民族だと感じたことが、何かに帰属することを相対化したい気持ちを起こさせたのかもしれない」と安部が続けて語っているように、そ

⁷ 磯田、前掲書、p.443.

⁸ 高野斗志美『安部公房論』（サンリオ山梨シルクセンター出版部、1971）、p.44.

⁹ 佐藤早希子「安部公房『壁』論」（『藤女子大学国文学雑誌』97巻、2017.11）、p.22-34.

ここでは「故郷」の否定と追及をめぐる主人公の大陸放浪がテーマとなっている¹⁰。

二十年前、愛していた与志子という女性を捨て、故郷の街を後にした主人公は、満洲で「放浪」する人生を選んだ(1・304)。その選択の動機は、あらゆる象徴を否定した先にある無、永遠に不変であるような実存を追求することにあった。「僕はあくまで存在を単純化したいのだ。真っ裸かな実存が見たいのだ。そこからどんな無が産れるのか、どんな永遠が産れるのか、それが知りたいのだ……」(1・276)。これが先の安部の言葉「国家とか郷土とかに帰属しない」形の「人間の存在」を探求することを意味している。このような考えを持つ主人公に対置される人物が、与志子である¹¹。与志子は、「無」としての「永遠」的「実存」とは何か、という主人公の問いに取り合わないような人物として描かれている。与志子は主人公に対して「私達はやはり現実支配されるのですね」「私達はやはり何一つ変化しない存在の中で浮き沈みしているのではないのでしょうか」(1・276)といい、そもそも主人公のいう「真っ裸かな実存」という假定自体を言下に否定する。与志子にとって「存在」とは、「何一つ変化しない存在」というものに巻き込まれながら「浮き沈み」する「私達」を内包する超越的なものとして、変化せずにより続けるものである。それは「現実」として私達を支配している、と与志子は主張する。ここで与志子は主人公を否定しつつも、「何一つ変化しない存在」という超越的なもので彼に救いをもたらそうとしている。しかし主人公は、与志子の救済的否定を受け容れない。主人公はそのような「何一つ変化しない存在」から逃れるために、「別なように「在る」」可能性を試行し続けることで、あらゆる「象徴」の中に「潜入」し、それを「忘却」することで、「存在」そのものの「象徴」への接近を試みたいと考えている。

結果として主人公がとった行動は、「ではさようなら」と言って与志子と別れ、「偉大なもの、遥かなものの故郷を求める放浪」に出ることであった。与志子との別れは、その第一歩として、偉大ではなく、遥かでもない「現実」の与志子という「象徴」的存在を否定し、その儚さを確認することであり、そのとき主人公は、「遥かなものの故郷」へと近づいたという「幸福」を感じながら、町を後にしたのだった(1・276-7)。

2.2 「存在象徴」の焦点が結ばれる場所としての「与志子」

その後二十年にわたる放浪の結果、結核を病みながら阿片による幻覚に惑わされる主人公は、「《斯く在る》」という問いに固執し、それを理解したいと思いながら理解できないままであった。「永い放浪……そう言った過去、最後の地……そう言った未来、それがこの村落の現存に保たれて、《斯く在る》自我の象徴を創り上げているらしいのだが、私にはもう過去や未来があると言う事を理解出来ないのだ」(1・274)。そこで主人

¹⁰ 「新人国記'82 外地32 現代の先端を行く」(『朝日新聞』1982.10.4夕刊) 1面。

¹¹ 先行研究では、与志子についてリルケの『マルテの手記』との対比から分析することなどが試みられている。(田中裕之『安部公房文学の研究』和泉書院、2012、pp.24-42)。リルケと安部の対比は呉前掲書や有村隆広の論文などでも行われているが、田中は与志子の存在に注目した点に独自性がある。

公は、「故郷」を否定して創出された「《自己の存在象徴》」を明らかにし、二十年前の自己の行為に意味を与えることができるかもしれないと考え、「終りし道の標べに」と題された手記、「第一のノート」を書き始める。「此の手記は、他でもない、あの煙と共に消えて行った、涙と共にあの都会の一隅に捨て去った、彼女の写真と青い手帳の為に」(1・304)と書かれている通り、それは「永遠」の「実存」に対する与志子の否定を反駁するためである。

その後、主人公は「阿片」と「死」を眼前に突きつけられたことで、「故郷」というものの新しい概念に到達する。「故郷」とは、「生理的、物理的、科学的、社会学的等の各要素に分けて考えられ、相互に自ら制約付け、又制約付けられるものの総和としての人間像そのもの」である。このように定義された「故郷」は、「無」でも「永遠」でもなく、「各象徴の刹那毎に生み出され、定められる存在象徴に過ぎぬ」。そして、主人公が「故郷を失った」と感じるのは、「その人間像を自我の存在象徴と融和させる事が出来なかった点に在るらしい」、と気づく(1・302)。「故郷」として次々に生み出される「存在象徴」は「自己の上に様々な説明を建設して行く」だけであり、純粋な「《斯く在る》」を、別の言葉で上書きすることで「忘却」させることだ。「最初の忘却」、つまり二十年前に与志子と別れ、青い手帳を燃やしたことが「創出」したものは、「偉大なもの、遥かなものの故郷を求める放浪」を続ける人物としての、「《自己の存在象徴》」であった(1・303)。ここまで考えを巡らせた主人公は、これまで「《斯く在る》」を明らかにしようとして「第一のノート」に書いてきた自らの記憶や経験が、何らの根底をも持たない「《斯く在る》」に、「限りない重複した比喩」を与える旅、次々に生み出され、相互に異なる「故郷」としての「存在象徴」のそれぞれを、「《斯く在る》」自己に対して繰り返してあてがう営みでしかなかったと理解した。そのとき主人公は、「喪失をも喪失させるに違いない運命」、つまり阿片による精神崩壊と「死」を前にしていた。そこにはもはや追うべき「無」も「永遠」もない。そこで主人公にとって次の課題となったのは、そのようなバラバラな「故郷」の「存在象徴」の根底にあって、それらが「統一」される「焦点」である。

「第一のノート」である「終りし道の標べに」が完成したのち、主人公は改めて「書かれざる言葉」と題された「第二のノート」を書き始め、「存在象徴」が「統一」される地点を指し示す。「その光の点は明瞭な焦点を結ぶ。それは……」それは「与志子」であり、主人公が「さようなら……愛する故郷よ」と「捨てぜりふを残して去った」時の「忘れ得ない光景」であった(1・309-10)。与志子の存在が「故郷」としての「存在象徴」を貫いている、言い換えれば、主人公にとってさまざまな「故郷」の「統一」的な「象徴」が与志子なのである。主人公は、「永遠」の「実存」を探し回った結果、その探求自体が与志子に対する否定から始まっていること、そのことがむしろ与志子を故郷として求めさせていることに気づいたのだ。

2.3 「現実」を肯定する与志子が際立たせる「放浪」の「無意味さ」

「終りし道の標べに」の続きとして書かれる「書かれざる言葉」で明かされるのは、主人公が旅に出た理由である。主人公にとってそのような必要が生じた経緯は、次のようなものである。そもそも主人公が与志子と知り合ったのは、与志子が数え年で19歳、主人公の親友である志門の紹介によるものであった(1・322-3)。当時与志子とその母の住む屋敷の貸間に住んでいた志門は、与志子に恋していた。のみならず、与志子の唯一の身寄りである母親の合意のもとで、与志子を許嫁としていた。しかし、志門は一片の良心により、後見人をも自分として与志子を当人の合意なく我がものとする決心がつかず、旧友であった主人公に後見人になることを依頼した(1・326-8)。主人公と与志子は愛し合う仲となったが、主人公は、自分も与志子も自分の意思で恋仲になったのではなく、全て「小さな神様」(1・325)である志門の策略によって踊らされていると考えていたため、自らのうちに芽生えた「愛」を信じるができなかったし、信じたいとも思えなかった(1・338-9)。志門から「君達は両方共愛しようとし合っている。申し分ないじゃないか。何を躊躇しているんだ。僕に対する気兼ねかい」と畳み掛けられるが、主人公は「いたたまらない嫌悪を感じ」る(1・339)。実際、与志子の母親が亡くなり、与志子の母の遺言によりまずは一ヶ月を与志子とともに暮らした主人公であったが、その間、与志子に対して沈黙を貫いたために、「もう一月も朝晩お目にかかりながら、こんな手紙など差しあげますことを、別にいいわけ致します必要もないと存じます。いいわけ致さねばならぬとすれば、それは貴方ではございませんでしょうか」(1・335)という書き出しで始まる手紙を与志子から受け取る始末であった。

主人公はそこまでを回想したときに、「青い手帳の最後の頁」にある「一つのもの」である「書かれざる言葉」がなんであったかをはっきりと思い出す¹²。しかしそれは、「小さな神様」である志門によって仕立て上げられた単なる「《斯く在る》」でしかなく、その「一つのもの」の「出発を証明するものは何もない」(1・339)。それゆえそれを「存在」とも「現象」とも呼べないとする主人公は、「もうたった一つの道しか残っていないのに気付いたのだった」。それは、与志子と主人公がそれぞれ、単に「存在」とも、「現象」とすらも言えない流された結果としての「《斯く在る》」ではなく、お互いがそれぞれ自分の意思で相手を見出し、そして自分の意思で愛し合うことができるようになる道でなければならぬ。そのためには「私は子供のように、始めからやり直すよりほかはない」。つまり、巡り会うところから始めなければならない。そう考えて、その考えの「正否を反省する間もなく、というよりは恐ろしい傾斜に足を踏みすべらせて、私はあの永い放浪に出たのだった」(1・340)。

ようやくここで、「終りし道の標べに」で描かれた主人公の葛藤と放浪の理由が読者にとって判明になる。主人公は、単に「《斯く在る》」だけのものではないような「《自

¹² その「一つのもの」は示唆されるだけで明記されないが、「愛している」というような言葉であっただろうと推察される。

己の存在象徴」を手にするために——つまり、他者の導きによらずに「与志子」と出会い、愛し、自らの「故郷」を手にするために——放浪を始めたのであった。これに対して、与志子が「私達はやはり現実支配されるのですね」「私達はやはり何一つ変化しない存在の中で浮き沈みしているのではないのでしょうか」(1・276)と言ったのは、たとえ「現実」が「小さな神様」志門にお膳立てされたものであり、そのような「現実」に支配されるとしても、その「現実」をそのまま肯定する、つまり主人公を愛する自分の心を肯定する、ということの意味していたのだ。そのことは、「第二のノート」でも、志門が主人公に「気がつかないのかい。与志子は君を愛しているのじゃないか」と訴える描写によって際立たされている(1・338)。

ここまでの経緯を思い出し、「第二のノート」に書き記した主人公は、まさにその「書かれざる言葉」を書こうとする。「書くべきことはこれからなのだ。ほんの僅かでも目を閉じればよい。忽ちあの日から今日までの時間を消し去る力を獲得する。そして此の瞬間からいよいよ本当の意味で青い手帳が復活するだろう」。「あの日から今日までの時間を消し去る」、つまりこの放浪を始める直前の時点に戻る。「私は先づお前たちに背を向け、一歩扉を出てふと振り返る。それから斯ういうのだ。止した。僕は新しい言葉を発見したのだ。僕は自分の言葉を告げることが出来る。もう旅に出るのは止した。僕はもっと別な方法でお前の手紙に答えることが出来る筈だ……そしてその試みと証しを此処に告げることこそ、此の手帳の目的ではなかったのか」(1・340)。主人公は、放浪ののちに、与志子の言葉や手紙を回想することで自らの放浪の「無意味さ」を理解し、その時間を「消し去り」、「書かれざる言葉」を与志子に届けることを最後の願いとしてこの手記を書いている¹³、という設定がここで明らかになる。

与志子は、いまこの、不如意な「現実」を「意味」あるものとする人物として、主人公のその「現実」を信じられない葛藤を「無意味」なものであったことを気づかせる人物として、設定されている。大陸の荒野の描写で強調される自分の放浪の「無意味さ」と、アヘンの描写によって倍化されている「現実」の持つ「意味」の頼りなさとの間で懊悩した主人公は、最終的に与志子のみならず「私が愛した一切のもの」を「想い浮かべ」、「私は総てを此処に賭けるのだ」と言って「粘土堀」に手を押し付ける。「粘土堀」は、「一生を自然科学の探求に捧げようとしていた幼い頃から、両親の死、初恋の少女、風にゆれる捲毛、学校のベル、志門の嘲り、そして与志子の沈黙」という主人公が「愛」したもの全て、つまり「現実」の「意味」が賭される唯一であり全てのものである。しかしこの時は、主人公は「粘土堀」の「裏切り」を受ける(1・387)。

「粘土堀」という壁の裏切りを受けたのちの主人公が、結局与志子のいう「現実」の「意味」に回帰するのか、あるいはそれを否定し「無意味」を追求して放浪を続けるのか、未完の本作品から窺い知ることはできない。しかしこの「粘土堀」という壁の位置付けは、

¹³ 「いつかは、此の手記が私の望む人の許に届く事があるに違いないと、私は拙い望みを掛けている」(1・306)。

確かに小説「壁」へと引き継がれている。

3 「壁」が描く「侵略」と「性差」

3.1 「侵略」に向き合う主人公の葛藤

安部公房の「壁」は、主人公が名刺によって名前を奪われ、さらに、胸の中が空っぽになってそこに曠野の風景やラクダを吸い込むようになる、という二重の困難に直面するところから始まる。主人公は曠野の写真を吸い込み、動物園のラクダを吸い込みつつあったという罪で法廷に立たされるが、名前を奪われているために裁く対象を同定できないとして、裁判は主人公が名前を取り戻すまで継続されることとなる。並行して、名刺や衣服、筆記用具などの身のまわり品も、主人公から解放されるために闘争するとして、主人公のあらゆる動作を阻害する。主人公は、釈然としないまま「世界の果」へと導かれ、自分の部屋の壁を胸の中へ吸収する。その壁は成長し、主人公自体が壁になったところで物語が終わる。

冒頭に触れた通り、この曠野の風景とラクダは安部の故郷瀋陽を念頭に置いたものであり、それを吸収することは満洲侵略のメタファーである。主人公に抵抗する身のまわり品は労働者たち¹⁴、「私設警察」として主人公を監視し、法廷で「委員」を務めるグリーン¹⁵の服の大男は米軍であり、その法廷は東京裁判として知られる極東国際軍事裁判を暗示している¹⁵という解釈も、これまでの研究で示されている。

この作品の重要な点は、主人公が曠野の風景の吸収や身のまわり品の自由について、なんら主体的な加害意識のないままに、一方的に裁かれ、あるいは一方的に敵意を持たれて反抗される、という部分にある。「胸の陰圧は、ぼくの気持なんかどうでもよく、ドクトルの言うようにただその空虚を満たすために吸収することばかりを望んでいる」(2・391)のであり、主人公が求めて「曠野」を吸収しているわけではない。それゆえ、動物園で捕まった時に主人公は「ぼくが何かしたのでしょうか？」(2・392)と言う。あるいは、主人公を「敵」と位置付けて闘争を仕掛ける身のまわり品に対して、「全然意外だ、君たちはそう思うかもしれないが、ぼくはそう思えない。ぼくはこれまで一度も君たちに敵意を持ったことなんかないよ」(2・417-8)と言う。曠野の風景の吸収が満洲の侵略であり、身のまわり品の抵抗が階級闘争を意味するとすれば、主人公は侵略者でありブルジョアであることによって告発されているわけであるが、主人公に自分が侵略したという自覚はなく、あるいは何かを抑圧したという意識もないことが描かれている。

¹⁴ ここにマルクス『資本論』の隠喩を指摘した鳥羽耕史の研究を参照のこと。鳥羽耕史『運動体・安部公房』(一葉社, 2007), pp.127-136.

¹⁵ 藤本朋希「安部公房『壁 第一部』S・カルマ氏の犯罪」研究(『山梨大学国語・国文と国語教育』21号, 2016), pp.140-142.

しかし他方で、主人公は自らが侵略したり抑圧したわけではないのだが、かといって「ぼくがこの法廷を無視し去るほど潔白ではない」(2・405)という自覚があり、あるいは身のまわり品と「なんとかして和解したい」「どういうわけでこんな目にあわされたのだろうと、その理由をいろいろ考えてみよう」(2・409)とも思う。つまり主人公は、侵略や抑圧を自らの意思で行ったわけではないため、法廷では無罪を主張し、身のまわり品の抵抗に「意外」だと吐露するが、さりとて、結果的に自らが侵略の主体となり、抑圧の主体となっていることの自覚と葛藤もあるために、法廷での裁きや身のまわり品が起す闘争から簡単に逃げ出してしまうこともできない。

3.2 主人公の葛藤を「馬鹿げたもの」とする「現実」の肯定者Y子

そこで主人公の逃走の導き手となるのが、Y子である。Y子は裁判に対して「こんな馬鹿げたもの」と言い放ち、主人公に対して「カルマさん、こんな死に損いや気狂いの裁判官なんかほっておいて、勝手に帰ってしましましょうよ」と誘う。先に触れた葛藤があるために主人公がすぐには決断できないでいると、Y子は「どうなさったの、カルマさん？ 行きましょうよ」「カルマさん。私たちも行きましょうよ。どうなさったの?」「行きましょうよ。」「行きましょうよ。」とやはりぼくの腕をつかんだまま、Y子が繰返して言いました」と同じフレーズを4回も繰返して主人公を逃走させようとする(2・405-7)。主人公は結局「強くY子にうながされ、たまらなく不安でしたが、Y子のために耐えねばならぬと、強く自分をうながし、逆にY子を引張るようにして」法廷から脱出する(2・407)。さらに主人公は「世界の果」へ逃走するのだが、そこへの導き手になるのもY子である。「もし、切符をお持ちですか?」いかにもそうした女らしく、黒いドレスを着て呼びかけたのは、マネキン人形のY子でした。「お入りなさいよ。」マネキンのY子が先に立って、泳ぐように椅子の間を案内して行きました(2・429-30)。そして、「世界の果」へ続く地下室で主人公に「踊って忘れましょう」と呼びかける(2・441)。

このように見れば、Y子の役割は主人公の免罪と解放ということになる。つまり、侵略したかどうかということを問う裁判自体を「馬鹿げたもの」として否定し、裁かれる立場から主人公を解放するために法廷から逃走し、最後には「世界の果」へ導くことで永遠に主人公が罪に問われないようにする。このような主人公とY子の関係は、第一に、本作品が書かれた1950年の状況における、敗戦直後の日本の男女の戦争に対する受け止め方の立場の違いが反映されたものと読むことができるだろう¹⁶。1946年から48年にかけて行われた極東国際軍事裁判(東京裁判)では裁くものも裁かれたものも男性であったのに対し、女性は数名が公職追放となったほかは、戦争責任を全く問われなかった¹⁷。ま

¹⁶ 安部がこれを書き上げたのは1950年3月5日。谷真介編『安部公房評伝年譜』(新泉社、2002)、p.29。

¹⁷ 加納実紀代や鈴木裕子らによって日本女性の戦争責任の追及が始まるのは、さらに四半世紀が経過した1970年代後半のことである。

た第二に、そこに内地で戦時を過ごした人々と、植民地で過ごした人々との違いを読み取ることもできる。法廷で裁判官に向けられた「うるさいわね。よしてちょうだい。私は自由にします！」(2・401)というY子の発言は、Y子が戦争を振り返らず、その責任も一顧だにする必要なく、戦後社会に生まれた新しい「自由」を謳歌し得た内地の人物であることを象徴しており、それに対する主人公のある種の羨望と戸惑いは、心中に「曠野」を抱えている引揚者がそれに容易には同調し得ないことを、暗に仄かしている。

3.3 「動物園」という設定のもつ意味

この物語の主要な舞台が「動物園」に設定されていることは、その男女の差異と外地経験の有無による差異という二つの対比を際立たせる効果を持っている。動物園を訪れた主人公は、「ライオン、縞馬、キリン、狼、そしてこのラクダ」という「草原と曠野」に故郷をもつ動物たちが「ぼくの胸の中の曠野を嗅ぎつけた」ことで、自分に対して「関心をよせた」ということに気づく(2・391)。自らが吸収した曠野は、動物園の動物にとっても奪われた故郷でもある。自分の胸の陰圧は「ただその空虚を満たすために」動物を吸収しようとし、動物たちも胸の中の曠野に行くことを望んでいる。しかし、動物たちをも吸収してしまうことは、既に侵略行為と訣別することを決意した戦後日本を生きる主人公の望みではない。主人公は「ぼくはやはりあくまでも自分自身でありたい」と思って「じっと誘惑に抵抗しつづけ」る(2・392)。これに対して、Y子は「いかにもたのしそうにキリンをかまいはじめ」(2・408)で主人公を慌てさせる。Y子には、主人公における曠野とキリンの間の葛藤、キリンが奪われた故郷を主人公が胸の中に占有しており、主人公はさらにキリンやラクダも吸い込んでしまうかもしれないという恐れ、つまりどのような行為が侵略となるのか、ということが理解されていない。

安部は幼少期から20代に敗戦を迎えるまで瀋陽で合計20年近くを過ごしており、安部の出身地は瀋陽だと言って差し支えない。しかし安部は、「その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見る」支配民族として生きていたことへの反省から、植民地での幼少期の思い出を美化することを拒否し、「植民地を故郷だということは絶対できない」、ゆえに瀋陽を「出身地として割切ることができない」という¹⁸。キリンやラクダを再び吸収することへの抵抗は、胸の中に故郷である植民地満洲の曠野に対する追憶を強めつつも、そこに生きる人々を被支配民族として「植物や風景のように見る」ことへの抵抗が重ね合わされている。胸の中にキリンを吸い込むのはもちろん、動物園の檻にキリンを閉じ込めることも望ましくはない。キリンは故郷の曠野にいないわけではなかったものだ。同様に、満洲を侵略するのも、侵略地を故郷とするイメージを心中に閉じ込めることも同様に否定されなければならない。これとは逆にY子は「動物って、見てると、いいものね」と動物を単なる観察対象にし、愛玩の対象とすることでその主

¹⁸ 安部公房「瀋陽十七年」(初出：1954年)『安部公房全集4[1953.10-1955.2]』(新潮社、1997)、pp.86-87.

体性を奪うことには抵抗がなく、動物園に行くことを「たのしみだわ」と屈託なく話す(2・408)。

さらに、動物園に行くという行為自体、この小説が発表された1951年においては、ある特殊な意味を持っている。というのも、Y子はそこで、「動物園で、小学校以来始めてなの」(2・408)と言っているからである。Y子はタイピストであり、当時の読者がそこからイメージするのは、20代前半で未婚の女性である¹⁹。小説内の年代を安部がこれを書き上げた1950年とみなし、Y子の年齢がそれに準じているとすれば、Y子は1920年代後半の生まれで、1930年代後半に小学生として動物園に行ったということになる。「小学校以来始めて」という言葉が、その後戦争を挟み、戦時猛獣処分で動物もいなかったために動物園に行くことはできなかった、ということ、同様の経験をした当時の同世代の読者は想起させられたであろう²⁰。つまりここでは、なぜ戦争があったのかという反省がないまま、戦争が終わって動物園に行くことのできる喜びだけを口にする人物として、Y子が描かれている。侵略の記憶との葛藤を持つ植民地生まれの主人公と、解放の喜びのみを享受する内地のY子という対比が、動物園という舞台装置によってくっきりと浮かび上がっている。

3.4 性別と居住地という二重の齟齬

安部はしかし、そのような戦後社会の享楽を、Y子に単純に帰したわけではない。むしろ、Y子が主人公に比してこれほど楽天的で前向きであるように描かれているのは、その後に明らかにされるY子の分裂のために用意された伏線である。Y子と改めて動物園に行く約束をした主人公が、身のまわり品との闘争を経て翌日の夕方に再び動物園へ辿り着いた時そこに見たのは、マネキンのY子であった。主人公が奪われたものが主人公の社会的立場を代わりに表象する名刺であったとすれば、Y子が奪われたのはY子の社会的立場を代わりに表象するマネキンであった。

Y子が堂々と主人公を逃走へと導き、あるいは動物園へ主人公とともに行くことを「たのしみ」にし、「じゃ、また明日、十時にね」と「やさしい恋人の声で」言ったのは(2・409)、男性社会の中で性を搾取される女性として位置づけられたY子というキャラクターの設定を象徴する振る舞いである。その設定は作品冒頭でも、主人公に成り代わった名刺が仕事中に「左手で書類の上をなぞりながら、右手でそっとY子の膝のあたりを撫でていました」(2・381)という表現によって端的に示されている。マネキンのY

¹⁹ 労働省婦人少年局「女子事務職員——実態調査報告——」(『婦人労働調査資料』第40号, 1961), p.4-10(復刻版: 高橋久子・原田冴子・湯沢雅彦『戦後婦人労働・生活調査資料集』第2巻労働篇[2](クレス出版, 1991), pp.372-378)。

²⁰ 上野動物園における戦時猛獣処分を描いた絵本として広く知られている『かわいそうなぞう』が発表されたのも、『壁』と同じ1951年である。土家由岐雄『かわいそうなぞう』(小川未明ほか編『愛の学校 二年生』東洋書館, 1951)。

子は、分裂前のY子のそのような性的振る舞いだけを切り出した存在だ。法廷からの逃走の時は分裂以前のY子であったのが、「世界の果」への逃走の時にははっきりとマネキンのY子に代わり、「世界の果」へ続く地下室でマネキンのY子が主人公に「踊って忘れましょう」と誘う(2・441)ことは、物語の中盤で主人公を逃走に導き、それを癒す役割を担っていたY子のあり方もまた、仮構のものに過ぎないことを示唆している。

そして、主人公が愛していたのもまた、そのような振る舞いであるところのマネキンのY子である。だからこそ主人公に「Y子はどこにいる?」と聞かれた時にマネキンのY子が「あら、私……Y子よ」と答え、主人公が「Y子はぼくの恋人なんだよ。愛することができたにちがいない唯一の人だ」と畳み掛けると、「本当かしら。もしそれが本当なら、私何も答えなくていいはずだわ」とマネキンのY子は言ったのである。主人公が「愛することができた」のがY子の性的振る舞いだけだったということは、主人公が「愛する」対象が本物のY子ではなくマネキンのY子であることを意味するからだ。果たして、Y子が主人公に近づこうとしたのは、あくまでマネキンのY子としての振る舞いであり、本物のY子の本心ではなかった。主人公がマネキンではなく本物のY子を「抱きよせよう」とすると、Y子の本心が現れる。「Y子はつつと離れ、肩で大きく息を吸込み、悲しげに見開いた大きな眼で彼をじっと見詰めながらゆっくり首を左右に振りはじめました」。それは、主人公に対して逃走と癒しを提供していたのがあくまでマネキンのY子としての勤めであり、本物のY子は主人公を拒絶していた、ということの表れに他ならない。「彼にはそれがどんな言葉よりも強い拒絶のように思われました」(2・442)。

本物のY子は、主人公に逃走と癒しを提供するマネキンのY子ではなく、本物のY子自身を愛して欲しいと望んでいた。その可能性に賭けて、「世界の果」につながる地下室では、解剖の名の下に主人公を刺殺しようとする「ドクトル」と「ユルバン教授」から、主人公を歌によって救う(2・444-6)。本物のY子は、主人公の葛藤を知ろうとし、逃避ではない解決を主人公に問おうとしていた。Y子は名刺から、「ぼくらの関係を見破るかもしれないぼくの私生活に関心を持っている俗物」と呼ばれていた(2・406)。マネキンのY子が主人公の名刺、つまり肩書きや立場を守るために主人公を逃走へ、その場限りの癒しへと導くのは異なり、本物のY子は主人公と名刺との関係を見破り、名刺ではない本物の主人公の持つ葛藤を理解し、その解決に寄与しようとしていたのである。しかし、主人公は「もし君が本当のことを知ったらどうだろう、君はきっとぼくのことを笑いだすにちがいないね」(2・408)と考えて、名前を失ったこと、曠野やラクダやキリンを吸収すること、名刺や身のまわり品と対立していることなどの「本当のこと」を、一言もY子に話さない。

結局、主人公はY子に何も告げずに「世界の果」である主人公の部屋へ続くドアに入ってしまう、本物のY子はそれを悲しげに、しかし引き止めずに見送る(2・447)。「世界の果」である主人公自身の部屋は、確かにそこを一步も出なければ、吸収の罪を問う法廷からも、そして自分が何かを吸収してしまう危険からも逃れられる。あるいはそこ

では身繕いする必要もないのであって、身のまわり品に対する支配を行う必要もない。そのような逃避を可能にするものが壁であり、壁そのものになることは、もはやその内側に逃避する主体もない、逃避の可能性そのものになるということを意味している。しかし、それは他者との関係の可能性を永遠に拒否するということと同義である。

4 おわりに

本論の冒頭で引用した通り、『終りし道の標べに』と「壁」を比較した磯田は、それらの主人公が「自己への誠実」が意味をなさない地点に立つものとして描かれていることを指摘していた。ここまでの分析を踏まえれば、葛藤の「無意味さ」に挫折して「意味」を回復しようと「粘土塀」に手を押し付け、「粘土塀」に裏切られた『終りし道の標べに』の主人公とは異なり、「壁」の主人公は「無意味さ」を抱えたまま壁になる。『終りし道の標べに』では「無意味」と「意味」との間の緊張関係に解決をみななかったが、「壁」においては「無意味」な無機物になることの方に意味が見出されている。主人公に対置された人物についてみれば、『終りし道の標べに』では「無意味」な葛藤の否定と「現実」の「意味」の強調に終始していた与志子に対し、Y子はそのような「現実」の「意味」のみを追い求めるものと、「無意味」な葛藤の意味を知ろうとするものとに分裂し、「無意味」の意味の可能性を示唆する人物が本物として描かれる。つまり、『終りし道の標べに』では単に「無意味」と「意味」の間の葛藤を描くにとどまったのが、「壁」ではその「無意味さ」の意味をこそが問われるようになったのであった。

女性との、あるいは内地人との相互理解が果たせないまま、男性かつ引揚者である主人公がますます「自己への誠実」へと落ち込んでいくさまを描いた安部の小説が同時代に受け入れられたのは、そこに描かれた葛藤が当時の社会的現実と類似していたからではないだろうか。先行研究が明らかにしたことが、敗戦直後の日本人男性の、戦争や植民地支配をめぐる悔悟と、価値観が転換した社会の中での自己の模索が主人公に投影されていることであったとすれば、本論はそれに対して、女性かつ内地の人物として主人公に対置された登場人物には、戦後を新しい現実として積極的に肯定し、享楽しようとする人々の葛藤が投影されていたことを明らかにした。

この二つの作品は、一方で、主人公のような自己に「喪失と崩壊」をもたらしてしまうような「虚弱」な人々が自らの主体性を発揮し、その責任を引き受けるためには、「無意味」であっても「自己に対して真面目であり、誠実であること」が必要であることを逆説的に示した。他方で、与志子やY子が主人公の葛藤の「無意味さ」を否定して「現実」に「意味」を見出すのは、与志子に対する志門、Y子に対する会社があったように、男性に抑圧され自主性を発揮し得ないというそれぞれが置かれた構造の中で生きていくための、ある種の諦念の結果であって、決してそこに安住できる「意味」ではなかった。安部のこの

二つの作品では、植民地体験が敗戦後の日本にもたらした「無意味さ」と「意味」という二つにそれぞれ同時代的な意味が付与されていたという点で興味深く、この点は他の作品の分析も進めていくことでさらに詳しく明らかにすることが出来るだろう。後考を期したい。

参考文献(Bibliography)

書籍

- 安部公房(1951)『S・カルマ氏の犯罪』『壁』月曜書房. Abe, Kobo (1951) *S. Karuma Shi no Hanzai, Kabe*. Getsuyo Shobo.
- 安部公房(1997)『安部公房全集1 [1942.12-1948.5]』新潮社. Abe, Kobo (1997) *Abe Kobo Zenhu 1 [1942.12-1948.5]*. Shinchosha.
- 安部公房(1997)『安部公房全集2 [1948.6-1951.5]』新潮社. Abe, Kobo (1997) *Abe Kobo Zenhu 2 [1948.6-1951.5]*. Shinchosha.
- 安部公房(1997)『瀧陽十七年』(初出1954)『安部公房全集4 [1953.10-1955.2]』新潮社. Abe, Kobo (1997) *Shinyo 17 nen, Abe Kobo Zenhu 4 [1953.10-1955.2]*. Shinchosha.
- 磯田光一(1969)『移動空間の人間学——安部公房論——』(初出1966)『現代日本文学大系76 石川淳 安部公房 大江健三郎集』筑摩書房. Isoda, Koichi, (1969) *Ido Kukan no Ningen Gaku: Abe Kobo Ron, Gendai Nihon Bungaku Taikai 76 Ishikawa Jun Abe Kobo Oe Kenzaburo*. Chikuma Shobo.
- 児玉久雄(1997)『砂山』『廣月報 安部公房全集1サブ・ノート』, 新潮社. Kodama, Hisao (1997) *Sunayama, Nise Geppo Abe Kobo Zenhu 1 Sabu Noto*. Shinchosha.
- 波瀾剛(2005)『越境のアヴァンギャルド』NTT出版. Naimigata, Tsuyoshi (2005) *Ekkyo no Abangyarudo*. NTT Shuppan.
- 呉美姪(2009)『安部公房の(戦後)——植民地経験と初期テクストをめぐって』クレイン. O, Michon (2009) *Abe Kobo no "Sengo": Shokuminchi Taiken to Shoki Tekusuto wo Megutte*. Kurein.
- 蘆田英治(1995)『安部公房『終りし道の標べに』ノート——「書く」ことをめぐって——』『論樹』9巻. Roda Eiji (1995) *Abe Kobo [Owarishi Michi no Shirube ni] noto: Kaku Koto wo Megutte, Ronju*. 9.
- 労働省婦人少年局(1961)『女子事務職員——実態調査報告——』『婦人労働調査資料』第40号(復刻版: 高橋久子・原田冴子・湯沢雅彦(1991)『戦後婦人労働・生活調査資料集』第2巻労働篇[2] クレス出版) Rodosho Fujin Shonen Kyoku (1961) *Joshi Jimu Shokuin: Jittai Chosa Houkoku, Fujin Rodo Chosa Shiryu*. 40 (Reprint: Takahashi, Hisako, Harada, Saeko, and Yuzawa Yasuhiko (1991) *Sengo Fujin Rodo, Seikatsu Chosa Siryoshu*. 2, Kuresu Shuppan).
- 坂堅太(2016)『安部公房と「日本」——植民地／占領経験とナショナリズム——』和泉書院. Saka, Kenta (2016) *Abe Kobo to "Nihon": Shokuminchi-Senryo Keiken to Nashonarizumu*. Izumi Shoin.
- 高野斗志美(1971)『安部公房論』サンリオ山梨シルクセンター出版部. Takano, Toshimi (1971) *Abe Kobo Ron*. Sanrio Yamanashi Shiruku Senta Shuppanbu.
- 田中裕之(2012)『安部公房文学の研究』和泉書院. Tanaka Hiroyuki (2012) *Abe Kobo Bungaku no Kenkyu*. Izumi Shoin.
- 谷真介編(2002)『安部公房評伝年譜』新泉社. Tani, Shinsuke ed. (2002) *Abe Kobo Hyoden Nenpu*. Shinsensha.
- 鳥羽耕史(2007)『運動体・安部公房』一葉社. Toba, Koji (2007) *Undotai, Abe Kobo*. Ichiyosha.
- 土家由岐雄(1951)『かわいそうな ぞう』小川未明ほか編『愛の学校 二年生』東洋書館. Tsuchiya, Yukio (1951)

Kawaisou na Zou, *Ai no Gakko : Ninensei*, Ogawa, Mimei et al. eds., Toyoshokan.

論文

- 藤本朋希 (2016) 「安部公房『壁 第一部 S・カルマ氏の犯罪』研究」『山梨大学国語・国文と国語教育』21号.
Fujimoto, Tomoki (2016) Abe Kobo "Kabe Daiichibu S. Karuma Shi no Hanzai" Kenkyu, *Yamanashi Daigaku Kokugo Kokubun to Kokugo Kyouiku*, vol. 21.
- 波田野節子 (2020) 「引揚げ——日本への移動：加害と被害の意識を中心に」『国際地域研究論集』11号. Hatano, Setsuko (2020) Hikiage - Nihon e no Ido : Kagai to Higai no Ishiki wo Chushin ni, *Kokusai Chiiki Kenkyu Ronshu*, vol. 11.
- 木村陽子 (2015) 「瀋陽の安部公房——作家となる以前の執筆活動を中心に——」『目白大学 人文学研究』11号.
Kimura, Yoko (2015) Shinyo no Abe Kobo : Sakka to Naru Izen no Shippitsu Katsudo wo Chushin ni, *Meiji Daigaku Jinbungaku Kenkyu*, vol. 11.
- 佐藤早希子 (2017.11) 「安部公房『壁』論」『藤女子大学国文学雑誌』97巻. Sato, Sakiko (Nov. 2017) Abe Kobo "Kabe" Ron, *Fuji Joshi Daigaku Kokubungaku Zasshi*, vol. 97.

新聞

- 「新人国記'82 外地32 現代の先端を行く」『朝日新聞』1982.10.4. Shinjinkokuki'82 Gaichi 32 Gendai no Sentan wo Iku, *Asahi Shinbun*, 1982.10.4.